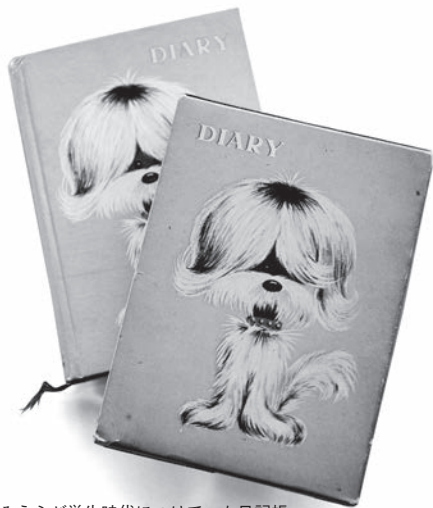


わたしが 日記を盛る理由

みうらじゅん
(イラストレーターなど)



みうらが学生時代につけていた日記帳。

学生時代、ひよんなことから母親に日記帳を盗み見されていることに気づき、以来、他人に見せることを前提とした日記をつけ始めたという、みうらじゅん。現実を歪曲し、盛り込んだ物語としてノートに書き留め続けたみうらの日記は、やがて現実すらも侵食し始める。事実と創作のあいだを行き交いながら歩んだその半生を、かつての日記をめぐりながら振り返る。

最近では、「自分らしき」なんてよく言いますが、俺はそもそも自分がわからないので、ましてや「らしき」なんてまったくわからずに生きてきました。でも本当の「らしき」って近くにいる三人くらいの友だちに聞いた、自分の噂のことでしょう。だから俺は「お前、そういうところあるよね」と言われたら、「あ、俺ってそうなんだ」と思ってそいつに合わせてずっと生きてきたんです。日記なんか、その「噂の俺」に合わせて書かなきゃならないから、ずいぶん盛ってきたわけです。

実家の本棚で長年眠っていた日記帳では、思春期のころから三五歳くらいまでの自分の日常が一冊に同居しています。ふと思いついて気まぐれに日記をつけたりするので、時期がバラバ

ラな「ごった煮」状態の日記帳ができあがるのです。

当時の日記をばらばらとめくって読んでみると、「生物89! 組で5番目よーん」とか書いてあります。これは学校で受けたテストの答案用紙が返却された日ですね。でも実のところ、当時の俺は答案用紙を全部帰り道のどぶに捨てて帰っていたので、この日記は真実ではありませんが、赤点だったはずなのに、点数を盛って書いてたんでしょう。

このような「盛った日記」は日常的につけていました。というか、当時つけていた日記のほとんどが、盛って書いたものなんです。「タバコがうまい」なんて書いてある日もあります。実際は家庭教師をしてもらっていた人のシケモクを二、三回ふかした程度のはず。ものすごいヘビースモーカーのように盛って書いています。つまり、これはそれっぽい雰囲気を出して読者を惑わす戦法。「あ、こいつ不良だ」と思わせる戦法を日記に盛り込んだだけなのです。なぜそんなことをするのかというと、これは他人に見せることを前提として書いた日記、つまり「見せ前日記」だったからです。

そもそも日記を盛って書き始めたのは、オカ対策でした。俺が中学生だったある日、本棚好きでした。でも書けば書くほどに、自分が見たい面白くない人間であることに気がついてしまう。俺が面白い人間だったら大恋愛をして傷ついたりして歌にできるのですが、男子校に通っていたので恋愛は皆無。当時は、「モテないのは男子校だからだ」ということになりましたが、今思えば単純に俺がモテていなかっただけです。俺の友だちは他校の女とつき合ったりしていたので、男子校だからモテないとい

の裏に隠してあった日記帳の場所が、昨日隠した位置からずれていたんです。「あつ、これは見られているな」とすぐに気づきましたね。俺は一人っ子だったので、一挙手一投足すべてが家族に注目されていたんです。オナニーもこれまで一〇回以上は家族に見つかっています。

これは余談ですが、俺の当時のオナニーの姿勢は「大地と交わる」姿勢だったんです。うつぶせになってベッドに局部を押しつけるやり方です。しかもなぜか素っ裸にならないとできない。小学生のとき、用を足す際に、素っ裸になる同級生がいたじゃないですか、あれのオナニーバージョンが俺のスタイルでした。だから親に見つかればもう逃れようがない。だってベッドに裸でうつぶせになって腰振ってるわけですからね……。親は親で、素っ裸の俺に「何してんだ?」とか聞いてくるのももう地獄。苦し紛れに、「泳ぐ練習してる」と言いわけをしてみるものの、泳ぐ練習ならパンツは穿くべきなので完全に破綻していますね。そんな不自然な泳ぎの練習を何度も見つけるものだから、さすがの親も呆れていたと思います。最後に親父に見つかったときはよく覚えていて、オナニー中に突然部屋のドアが開いたと思ったら、すぐに閉まった。少しの沈黙をおいてドアの向

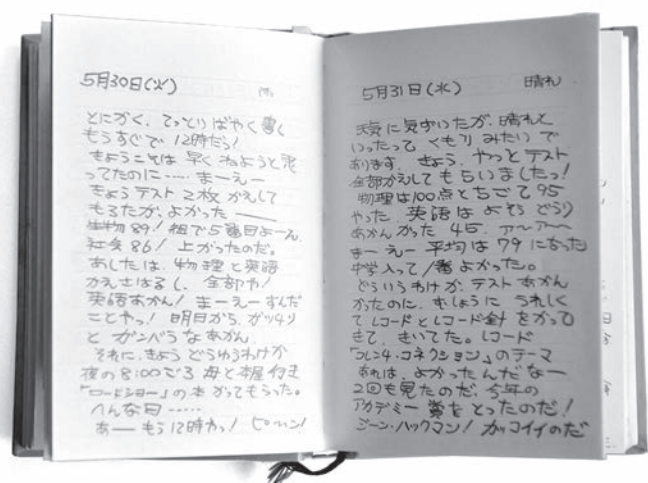
こう側からひと言、「たいがいにせえ」。

……と、まあそんな厳しい(?)監視体制におかれていたので、当然日記も親の検閲の対象でした。机の中もしょっちゅう見られていたの、ある日俺は、「もう人生、すべて、見せ前でやろう」と心に決めました。つまりオカんに読まれる前提で、オカンを幻滅させないような日記を書くことにしたのです。

たとえば当時の俺は毎週日曜になると、京都の四条にある繁華街で映画を観ていました。それまでは、ただ映画を観にいった事実だけを書いていただけで、それだとオカんも読み応えがないだろうということで、途中からデートの話にしたんです。どこで待ち合わせをして、どんなふうに映画を観て、そのときに恋人のことをどう思ったのかも書いた。もちろん、本当は恋人なんていません。オカんに「うちの息子も一人前になったか」と思わせるための夢想の世界の出来事をでっちあげたんですね。

三浦純と、みうらじゅん

そんなわけで日記も書いてたし、学校では授業中にすることがないからずっと歌の詞も書いていました。文章を書くのは子どものころから



母親を安心させるため、テストの点数を盛って書いたという当時の日記。

う法則は成立しないんですよ。おまけに家も普通だし、学校もそんなに嫌いじゃなかったの、アンチな歌を書けるようなネタはないんですね、そもそも。ネタがないから『期末テストの歌』みたいなタイトルの詞にメロディーつけて友だちに歌って聞かせてみるのですが、彼らも「その歌、つまんない？」みたいに言うわけです。「ポップ・ディランとかはもつと大きいテーマを歌ってるぜ」と。でも俺にはそんなのいいです、大きなテーマを歌える人って選ばれし人なんですよね、結局は。

俺、選ばれていなかったの、もう現実はいいやと思っただけは夢の世界に行くことにしました。憧れ続けていたアーチストの横尾忠則さんがつけていた『私の夢日記』（角川文庫）に影響を受けたのです。横尾さんはUFOが地球へ飛来したりする超現実的な夢を見たときに書いておられました。俺もそんな夢を見たかったから、毎晩枕元に日記帳を置いて、夢日記を始めたんです。でも俺の世界は夢の中でもつまらなかつた。「なんかこの夢どっかで見たことあんなあ」と思ったら、昨日あったことそのまんまなんです。なんだ、復習かよ、みたいな。UFOの代わりに出てくるのは、友だちばかり。しかも、存在感のないやつしか出てこない。面白い夢を

見るというのもやはり才能であって、無才な人間は面白い夢すらも見ることができないんです。こんなまともでもつまらないなあと思って、結局は夢日記もやめてしまいました。



小さなちりが、ふわーと浮かんで落ちてゆくことをただ書いた詞です。このときばかりは本当に焦りましたね。「自分には、いよいよちりくらいしか書くテーマが見つけれなくなっているんだ」と。このときはもう曲もつけられないくらい落ち込みました。

ここに来て、ようやく「単なる個人の真実なんてどうでもいいんだ」ということに気がついたんです。どう頑張っても俺は普通の高校生だったりするわけですから、そんなどこにもいる一般の人の真実なんて面白くなくて当たり前。書くことがないんだから、いっそ退屈な自分から分離したタレント「みうらじゅん」に、なんでも盛って「面白く演じさせよう」と思いました。つまり、「三浦純」である自分は、演者「みうらじゅん」の日常を書けばいい。言うなれば、「俺」と「おれ」の二人でつくる劇団をやることにしたわけです。

日記からエッセイ、そして小説へ

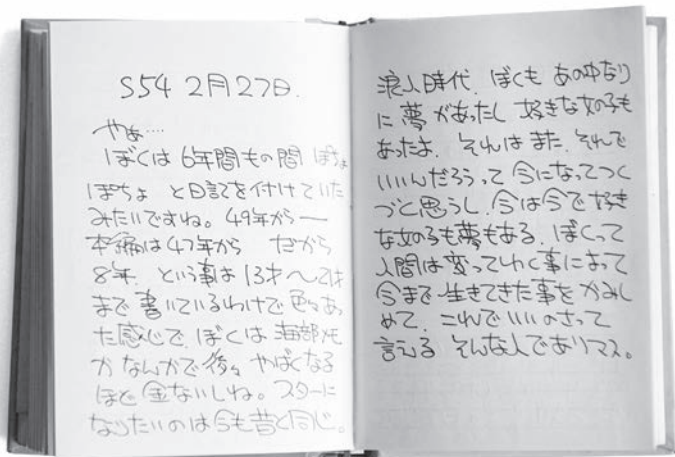
こうして自分の中のもう一人の自分「みうらじゅん」の夢想の世界の行動を、「三浦純」である俺が編集者として日記に書きつけていくという日々が始まりました。

あらためて日記を読み返してみると、我ながらかなりちゃんと日記を残しています。そのおかげで今年の一月には川崎市市民ミュージアムで「M's FES. みうらじゅんフェス! マイブームの全貌展 SINCE 1958」という展示会も開催できました。そもそも日記を書いていると

きから「ひとり博物館」をやっているようなテンションだったので、何十年も経って当時の日記が展示物となったのは感慨深いですね。

ちなみに日記は、ある程度書き溜めたらきちんと製本していました。中三ぐらいのころには、製本した日記が三〇冊ほど溜まっていたと思います。ここまで溜まってくると、もつと多くの人に読んでほしいという気持ちになってきて、盛りまくった自分の日記をある新聞社に送った

青春時代の日記には、さりげなく女性の影をちらつかせる記述も。



ことがあります。不採用だったときに返信してもらうために、返信用の切手を何枚か入れて、オヤジに包んで送ってもらったのをよく覚えています。でも、結局新聞社からはなんの返事もなかった。まず「無名の俺の日記を本にしてください」という堂々たる態度にも問題はあったんだと思いますが、せっかくな製本した日記は、結局二度と返らぬものとなってしまいました。で、高一になって、そういう盛った日記のことを「エッセイ」と呼ぶと知りました。そして盛った内容をすべて嘘に置き換えると、それは「小説」となります。つまり、日記とエッセイ、そして小説は、創作として地続きなんです。

郵便はがきの「好きだ」

俺の「見せ前主義」は、日記に限りません。とにかくなんでも見せ前なので、ラブレターなんかも友だちに見せていました。しかも、特に好きな人がいるわけでもないのに、架空の相手に向けてラブレターを書いていたんです。いつか好きな人ができたらその場で渡そうと思って、書いたラブレターをずっとかばんに入れて持ち歩いていたのを覚えています。時々友だちに見せて、「ここ、こうしたほうがいいよ」と意見を

聞いて、ブラッシュアップしていくんですよ。見せ前主義は、時として悲しい結果をもたらすこともあります。あれは小学生のころ、好きだった女の子にラブレターを送って大騒ぎになったんです。

俺はよく地元の深夜ラジオを聴いていたのですが、あるとき、兄貴肌のラジオパーソナリティーに「好きなやつがいるんだけど、どうしたらいい？」と悩みを相談してみたんです。すると兄貴は「好きだとはつきり書いてラブレターを出せ」とラジオ越しに言ってきた。それを真に受けて、すぐさまかばんの中のラブレターを……という展開にはならず、なぜか郵便はがきに「好きだ」と書いて投函したんです。向こうの両親に見られることまで計算できておらず、この本気のラブレターが不覚にも「見せ前」となったことは言うまでもありません。まあ不思議なもので、このエピソードは後に『色即せねいしょん』という自伝的映画の一コマになりました。

一億総見せ前時代

最近では、SNSで誰もが映えたがっています。でも、ありのままの自分を映えさせること

が難しいというのは、俺は何十年前前から知っています。だからこそ、みんなも自分が映えられないことに早く気がつくべきだと思うのです。考えてもみてください、突飛な行動をせずにありのままに映えられるやつなんて、犯罪者ぐらゐのものだと思いませんか？ SNSの登場によって「一億総見せ前時代」が到来したわけですが、その中で映えようとするならば、やはり「ひとり映え」しないと勝ち目はありません。海賊の格好をして街を歩くとか、そこまでする覚悟があれば、今すぐにでも映えますよ。でも、その映え方はしたくないわけですよ、みんなは。今、そういう変なことする人は「イタい人」とされてしまいますから。昔は「変な人に思われたい」というのが、主流の映え方でしたが、あるときから変な人がコミュニティの低位になってしまいました。

ニューヨークとオナニーの衝撃

横尾忠則さんの『PUSH』(講談社)と吉田拓郎さんの『気ままな絵日記』(立風書房)は、俺に強い影響を与えた日記作品でした。

『PUSH』を買ったのは中学生のころ。白い箱に入っていて、日記なのに、ところどころに

外国人女性のヌード写真が入っているんです。で、そのヌード写真の上に活版印刷の文字で日記が書かれています。読みにくいのですが、この演出が、この本を日記を超えた日記にしている。

その中にニューヨークの日記がありました。ちよつとうる覚えだから、横尾さんがお聞きになったら叱られるかもしれないけど、「ニューヨークに行つてジャスパール・ジョーンズに会う」つて書いてるんですよ。で、その日記は最後にぼそつと「オナニーをする」という一文で終わっている。これには衝撃を受けましたね。思春期真っ只中の俺は当然それまでオナニーのことなんて日記に書いていませんでしたし、なんなら一番他人に見られたくないことだと思っていました。それを憧れの人が日記に書いてるんですから、すつげえなあ！ と思いましたよ。

それ以降、俺もオナニーについて書くようになって、これまでしつこいほど書きました。還暦を迎えた今でも、そんな原稿を書いているのは、どうかと思えますが。

きつとあやふやな走馬灯

吉田拓郎さんの『気ままな絵日記』も後半が

日記形式になっていて、七〇年代に青春真っ只中だった俺たちの世代は、この本を通して「吉田拓郎」というイメージを心に焼きつけたものです。

大人になったある日、編集者が「雑誌で吉田拓郎さんのインタビューがある」なんて言うから無理やりついていかせてもらつて、憧れの拓郎さんと話す機会がありました。そのときに、『気ままな絵日記』のことを聞いたのですが、拓郎さんは「あ、それ、イメージだから」と言っただけです。「糸井重里さんっているだろ？ コピーライターつてうまく書くじゃない。俺、あれだから。俺は歌のコピーライターなんだ」と。そのときは「うまく書く」という意味があまりわからなかったのですが、拓郎さんは、「丘をのぼつて下界を見ると」(「おろかなるひとり言」)と歌いながら、実は丘になんて登ってないんだとわかりました。拓郎さんの『気ままな絵日記』には「家出した」つて書いてあるし、俺も拓郎さんに憧れて家出したこともあるのですが、それはあくまで拓郎さんをイメージした家出であつて、家出する理由など何もありませんでした。

ちなみに日本のフォークシンガーにとって憧れの一人であるポップ・デイルは、さらに上を

いきます。

アンソニー・スカデュトが書いたデイルの伝記『ポップ・デイル』を高校のときに初めて読んで痺れました。しかし、後になって、そこに書かれていることは多くが盛つてあることだと知りました。ちなみにデイルの伝記の元ネタは、デイズ・ヴァン・ロンクという歌手の自伝。デイズはニューヨークのカフェで歌っていた人で、放浪の詩人でした。デイズに影響を受けた年下のポップ・デイルが、自分のことのように語っていたのが、ポップ・デイル伝説という虚構を生んだそうです。

デイルの盛り伝説が暴かれたのは、映画監督のマーティン・スコセッシがデイルのドキュメンタリー『ポップ・デイル ノー・ディレクション・ホーム』を撮ったときです。このドキュメンタリーでデイルが当時つき合っていた彼女にまでインタビューを行ったところ、ポップ・デイル伝説はかなりのでつちあげだということが明らかにになりました。

でもそんなデイルに憧れて、日本のフォークシンガーは生まれた。「日本のフォークシンガーはこうじゃないといけない」というイメージは、それぞれのボク・デイルだったと思います。



日記帳には、みうらのスクラップ魔としての顔も垣間見える。

拓郎さんはデイルのイメージを追っていた。だからこそ、拓郎さんは普通の高校生であつてはいけない。そんな自分をどうにか消すために、日記上では家出したりしなきゃならなかったんですね。

そして拓郎さん、デイル、横尾さんの、イ

から現実を盛らないといけない。「みうらじゅん」は、そうして生まれたキャラなんです。今では気づかずによく同じ人に同じ話を、盛り方を変えて三回ぐらいしていることも日常茶飯事です。「その話、前も聞いたけど、前のとちよつと変わつてない？」なんて言われて、まずい思いをする日々がいつしか日常となり、還暦を迎えた今では、それが俺の人生になりました。盛っているのが自然体になっているので、どこを盛つて話していたのが自分でもわからなくなっています。だからきつと人生の幕が引かれるときに見る走馬灯も、盛られているのでしょう。

構成・文 森田彦

でも、もう自分では気づけないと思うんです。人生最後の日、走馬灯を見ながら「あれ？ これ盛つてない？」と混乱しながら死んでいくんでしょうね、俺は。

みうらじゅん イラストレーターなど。一九五八年、京都府生まれ。武蔵野美術大学造形学部視覚伝達デザイン学科卒業。同大学在学中に漫画家としてデビュー。漫画家、イラストレーター、エッセイスト、ミュージシャンなどとして幅広く活躍中。著書に「カスハガの世界」「いやげ物」(共にちくま文庫)、「ない仕事」の作り方(文藝春秋)などがある。